

博士学位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	魚谷 奈央
論文題目	摂食障害及び食行動異常に対する臨床栄養学的研究
論文審査担当者	主 査 宮脇 尚志 ㊞
	審査委員 今井 佐恵子 ㊞
	審査委員 川添 禎浩 ㊞

摂食障害は、単なる食欲や食行動の異常ではなく、体重に対する過度のこだわりがあることや自己評価への体重・体形の過剰な影響といった心理的要因に基づく食行動の重篤な障害であり、若年女性を中心に2万人以上の患者が存在する。摂食障害や若年女性のやせは食に大きく関わるが、日本ではこれらの治療に管理栄養士が関与する医療機関は極めて少なく、栄養学的なエビデンスもほとんどなく、現時点でコンセンサスの得られた栄養食事療法も存在しない。

そこで本論文では、以下の三研究を行うことにより、摂食障害及び食行動異常に対する臨床栄養学的なエビデンスを創出することを目的とした。以下に、本論文の審査結果を要約する。

第一章：外来摂食障害患者における病型別の食事内容の特徴についての検討

摂食障害には、主に神経性やせ症（以下AN）と神経性過食症（以下BN）があり、さらにANは厳しい食事制限を行う「摂食制限型（以下AN制限型）」と過食及び自己誘発性嘔吐等の排出行為を行う「過食/排出型（以下AN過食排出型）」に分類される。また、BNではBMIは正常であるが、繰り返される過食と、体重増加を防ぐための排出行為が認められる。それぞれの病型で食行動が異なるが、どのような食品を摂取または制限しているかは明らかでは無い。そこで本研究では、精神科で外来治療を受けている女性のうちAN制限型患者、AN過食排出型患者、BN患者の47名（中央値37.5歳）と、健常群として食行動異常のない成人就労女性98名に対して、簡易型自記式食事歴法質問票（BDHQ）を用いて、病型別に食事内容を比較検討した。その結果、4群でエネルギー摂取量及びエネルギー産生栄養素の摂取比率は有意な差が認められなかったが、食品群別摂取量では、すべての摂食障害群が、健常群に比べて穀類の摂取量で有意に低値を示した。また、AN制限群は、健常群に比べて穀類、油脂類、菓子類の摂取量で有意に低値を示した一方で、野菜類、豆類、乳類の摂取量では有意に高値を示した。さらに、AN制限群はAN過食排出群に比べ野菜類の摂取量で有意に高値を示した。本研究から、摂食障害患者と健常者との間には食事内容に差があり、さらに摂食障害の病型別にも食事内容は異なることが示唆された。

第二章：摂食障害患者における病型ごとの間質液中のグルコース濃度の変動についての検討

摂食障害の病態には極端な摂食制限や過食があり、重度の低栄養状態で起こる低血糖は摂食障害患

者の死因のひとつとされるが、摂食障害患者における血糖変動に関する報告は極めて乏しい。そこで本研究では、摂食障害患者に対して isCGM システムを用いて持続的にグルコース濃度の測定を行い、病型ごとに血糖変動の特徴を明らかにすることで、摂食障害患者に対する血糖変動を考慮した食事指導につなげることを目的とした。精神科クリニックで外来治療を受けている女性摂食障害患者 18 名(34.1±12.0 歳) (AN 摂食制限群 4 名、AN 過食排出群 9 名、BN 群 5 名の 3 群) を対象に、isCGM (商品名: FreeStyle リブレ Pro) を上腕伸側部に装着し、7 日から 14 日間連続で 15 分間ごとに間質液中のグルコース濃度を測定した。その結果、全患者の 5 日間の平均グルコース値は 91.8±7.3mg/dl で 3 群間に有意な差は認められなかったが、患者群の 24 時間の血糖変動の大きさを示す平均血糖変動幅(MAGE)の平均値は 52.8±20.5mg/dl であり、特に、過食排出を伴う病型の患者が高値であった。5 日間に観測された低血糖の頻度の中央値は、AN 制限群、AN 過食排出群、BN 群でそれぞれ 0 回、3 回、5 回であり、BN 群は AN 制限群と比べて有意に高値を示した。摂食障害患者は病型ごとに異なる血糖変動の特徴を持ち、過食排出を伴う病型の患者は血糖変動幅 (MAGE) が大きく、低血糖の頻度が高い可能性が示唆された。

第三章：若年および中年女性におけるボディイメージの歪みと食事との関連についての検討

ボディイメージとは、自身の身体について持つイメージのことである。ボディイメージの歪みは摂食障害に関与するとされており、これまで歪みの程度や食事との関連について検討した報告は極めて乏しい。そこで本研究では、若年及び中年女性のボディイメージの歪みと BMI 及び食事との関連を明らかにすることを目的とした。20-40 歳の成人就労女性 111 名 (中央値 26 歳) を対象とした。ボディイメージの測定には客観的基準を有するシルエット図である Japanese Body Silhouette Scale type-I (J-BSS-I) を用いて、BMI との関連及びボディイメージの歪みが大きい者の特徴を検討した。食事調査には BDHQ を用いた。その結果、ボディイメージの歪みの程度と BMI は有意な負の相関が認められ、やせの程度が大きい者ほど、ボディイメージの歪みが大きいことが明らかとなった。また、BMI が 20.7kg/m²を下回るとボディイメージを過大評価する傾向が認められた。ボディイメージの歪み高値群は低値群と比べ、洋菓子類の摂取量及び 10 代でのダイエット経験がある者の割合が有意に高値を示した一方で、揚げ物の摂取量で有意に低値を示した。本研究により、女性への栄養指導において、BMI、食事内容、10 代でのダイエット経験を把握することにより、ボディイメージの歪みが大きい者や摂食障害の可能性のある者を発見できる可能性があると考えられた。

申請者は、摂食障害がその病型により異なる食事内容や血糖変動がみられ、またそのリスクであるやせはボディイメージの歪みと関連することをこれらの研究により初めて明らかにした。これらの結果はいずれも、摂食障害の治療および予防において、栄養学的のみならず臨床的に極めて重要となるエビデンスであり、極めて意義ある研究であると考えられる。よって、審査委員一同は、本論文が京都女子大学大学院家政学研究科 博士 (学術) の学位論文として価値あるものと認めた。